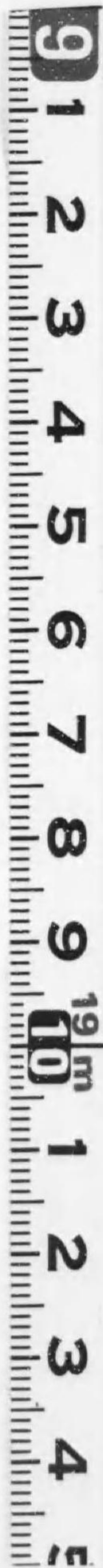


哲界一瞥

特117

172

始



哲界一瞥はしがき

本書のはしがきとして、哲學堂經營の始末を述ぶるに、明治三十二年哲學館の敷地内に、京北中學校を併設せし以來、兩校を置するの急要を感じ、將來哲學館を郡部に移すの意見を起したりしが、幸に豊多摩郡野方村字和田山に賣地あることを聞き、且つ其地は和田義盛の遺跡にして、東京府下名所の一なることをも知り、早速購入の上、之を哲學館將來の敷地と豫定し、其標木を建てた、其後哲學館が文部大臣より大學公稱を許可せられたるに付、其紀念として明治三十七年に三間四面の一小堂を此に建築したが、今日の所謂四聖堂にして、實に哲學堂の起元である、其後余が神經衰弱症にかかりたる爲に、明治三十九年一月哲學館大學(今の東洋大學)を退隱するに當り、種々の都合上、學校移轉を見合すことになり、後繼者と相談の結果、之を余の退隱所とするの名義を以て、自ら其經營だけを引受くることに約束した、愈々之を引受けたる以上は、將來永く世道人心を裨補するものになさんとの計畫を起し、遂に精神修養的公園とすることに定め、其建築費及び維持費として七万五千圓を積立つる豫算を立てた、而して此金額を集むる方法としては、有志者の寄附金を仰ぐことは本意でないから、別に工夫することに取極めた、

曾て國民道德の大本たる教育勅語の御聖旨を普及徹底せしむるに

は、學校教育以外に社會教育、民間教育を各町村に起さざるべからずとは、余の年來の持論にして、學校退隱後は専ら其方に力を盡さんと思ひ、神經衰弱を醫する良法は田舎の旅行にありと聞き、療養の旁ら日本全國の各郡各郷を周遊して、其趣旨を演述せんことに定めしが、開會の經費を支辨する方法を案出する必要が起つて來た、是に於て余は生來惡筆なる廉を以て、數十年間全く禁筆したりしが、近年餘儀なく其禁を解き、地方巡遊中、町村有志の所望に應じて額や掛物の揮毫をなすことに決し、之に依て受けたる謝儀の半額は開會經費に充用し、若くは町村の公共事業、慈善事業に寄附することとし、他の半額は哲學堂の建築費維持費に充用することとして、明治三十九年より全國行脚の途に就きたる次第である、

以上の方法により集まりたる金は、之を支出して逐年哲學堂の建設を進行し、今日までに六賢臺、三學亭、唯物園、唯心亭等を竣功することに運んだ、其詳細は年々發行の南船北馬集中に報告してある、試に明治四十三年末に於ける全五ヶ年間の收支總計を掲記すれば、

収入金、二万四千百八十九圓十八錢五厘
支出金、二万二千八百九十四圓七十九錢五厘

此支出金の中には土地購入費も合算してある、其地所の過半は最初哲學館にて購入せしものなれども、余は己れの任意にて其代金は漸次に東洋大學の方へ支拂ふことに致した、其後新に購入したる地

所の代金も加はりて居る、今後愈々全國を一周し終るには、尙ほ此上に十年間を要するに付、それまでに豫定の七万五千圓を満たしたいと思ふ、

此の如く惡筆を揮うて謝儀を拜受しては、世間に對して鐵面皮のやうなれども、是れもとより余の快しとする所にあらずして、万止むを得ざるより案出したる方法に過ぎぬ、依て其金は決して一家の爲、子孫の爲に保存するにあらずして、全く國家社會に對して其恩に報答する爲なることを廣く世間の方々に記憶して戴きたい、

余は幼時より學校教育を受けたる年月は滿二十年にして、自ら學校を造りて人を教育したりし年月も、矢張二十年間であつた、是れ恰も數理に於て年月の差引が出来るから、教育より受けし恩債の返却が出来たと申して宜い、愈々學校を退隱するに當り、余より從來の財産全部、即ち拾參万五千九百三十五圓六十一錢七厘を寄附して、東洋大學財團及び京北財團を組織し、明治三十九年に文部大臣に申請したる次第である、是れ正しく余が教育より受けし恩義に報答したるものと思ふ、然し國家社會より受けたる恩に對しては未だ報答して居らぬ、依て其報答として哲學堂の公園を完成し、之を國家社會に貢獻する考を起した、故に他日完成の曉には、更に之を財團法人とするか、左なければ其全部を舉げて政府に献上する赤心である、されば其經營の決して子孫の爲にする私情にあらざることだけは、天下の公衆に告白して置かねばならぬ、但し惡筆を揮ひたる點は、

他日完成の日を待ち、哲學堂内に筆塚を建て、廣く謝罪するつもりである。

今より十年を経て全國を巡りたりし時に至り、己れの餘命のあらん限りは、自ら哲學堂の門番となり、毎朝灑掃の餘暇に、來觀の諸氏に對し、坐談說法をなし、其旁ら學生の監督をなしたいと思ふ近頃は地方旅行の御蔭にて、神經衰弱の方は全快したれば、東洋大學々長に復歸せよと、内外よりの勸告を受け居るも、固辭して應せざるは、此將來の豫望を有する故である、曾て學校を退隱するときに、今後の半生は學校教育に従事せずして、専ら社會教育、民間教育に盡瘁することを公言し、學校に永訣を告げて去りたることなれば、再び學校へ戻るときは、死者の復活か、或は幽靈の現出と同様であるからと申して固く斷り、引續きて一方にては全國の巡講に東奔西走し、他方にては哲學堂内に開設すべき圖書館博物館の經營を進行する積りなれば、頗る多忙を極め、到底其傍に學校の監督經營を兼擔する餘暇はない、斯くして十年後に至り、全國の周遊を結了し、哲學堂の設備を完成したる時には、堂内に幽棲して老境を送り、坐談說法、修身講話を以て、青年の指導に當る心算である、其材料としては死書死學よりも、寧ろ活學活書を取りたいと思ふ、活學活書とは世界に於ける人間社會の活動せる現狀をいふのである、此目的に對しては今後少くとも一二回は世界を周遊して、今日まで未だ經歷せざる國々を歴訪せなければならぬ、余の素志は一生の間に於て人間の住ん

で居る國だけは悉く歴遊して、其人情風俗習慣及び活動の實況を目撃視察し、以て講話の資料を蒐蓄したいと思ふ、是れが所謂活學活書である、斯くして余の學校退隱後の殘生は全く國家社會の爲に盡くし、世の中より受けたる大恩に報謝する決心に外ならぬ、古人は兒孫の爲に美田を買はずと申したが、余は私産を遺して公衆に分與せよとの主義を唱へて居る、其詩は左に掲げて置く、

人生如_レ夢而非_レ夢、我食我衣誰所_レ貢、ヨリハ與_下爲_二兒孫_一買_中美田_ハ、
寧遺_二私產_一分_二公衆_一、

右の主義であるから、己れの一身は出來得る限り、質素を守り節儉を行ひ、是によりて餘したるものは、公衆に分與する精神にて、哲學堂の方にあてはむる心得である、世間或は余の本意のある所を誤解せんことを恐れ、此くの如く贅言を記して、本書の卷初に題したる次第である。

大正二年五月 哲學堂主 井上圓了記

本書目次

- 一、哲學堂の由來
- 二、哲學堂の内容
- 三、四學堂及庭園
- 四、釋尊
- 五、孔聖
- 六、瑣賢
- 七、韓哲
- 八、聖德太子
- 九、菅公
- 十、莊子
- 十一、朱子
- 十二、龍樹大士
- 十三、迦毘羅仙
- 十四、平田篤胤大人
- 十五、林羅山先生
- 十六、釋凝然大德
- 十七、結言

哲界一瞥

井上圓了述

一、哲學堂の由來

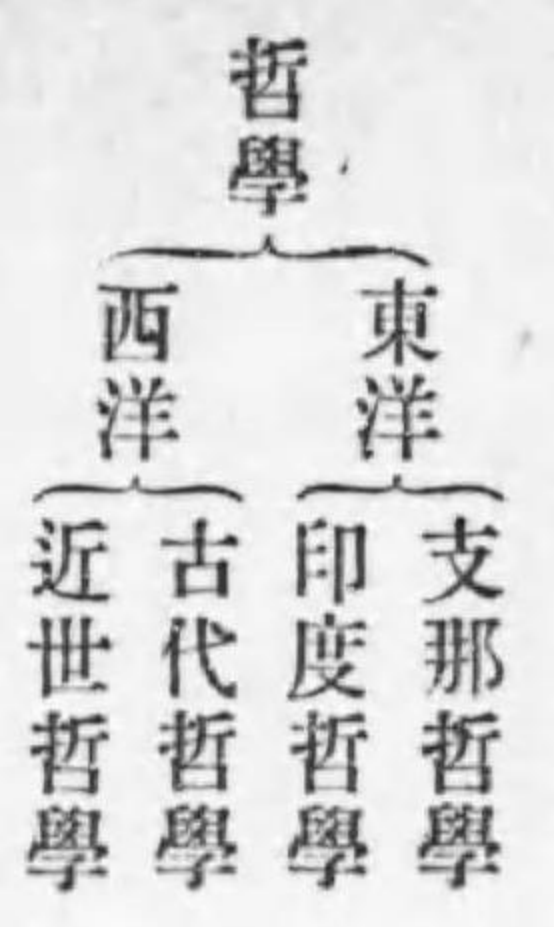
哲學堂は明治三十七年哲學館の大學公稱を文部省より許可せられたる紀念として、一棟を建設したるに始まり、同三十九年一月余が同大學を退隱せるに付、之を己れの退隱所と定めたるより起つて居ます。既に之を退隱所として自ら經營することになりたれば、只自己の精神修養場とするのみならず、將來永く多數の人々の修養場となしたく思ひ、更に増築の計畫を起すに至りました。即ち最初は四聖堂のみならずしが、之に六賢臺、三學亭を別置し、之を總稱して哲學堂となすことに定めたる次第である、而して其目的は宗教的崇拜の意にあらざして、教育的、倫理的、哲學的精神修養の意に外ならぬ、即ち此に奉崇せる聖賢は其人物人格、其性徳言行、いづれも我

輩の模範とし手本とすべき人なれば、時々之に接近して各自の修養をなさしむる爲である、而して其所在地は東京府下豊多摩郡野方村大字江古田小字和田山にして、昔時和田義盛の居住せし處なりと傳へて居る、徳川時代には一時某侯の別荘となりたることあると申します、其土地は高燥にして清閑、且つ多少の眺望もあれば、外圍の事情が精神修養を助くることが出来る、況んや其内容には古今東西の聖賢を奉崇するに於てをや、余が存命中聊か微力を盡し、其死後精神修養的私立公園として、永く保存せられ、世道の萬一を裨補するを得ば本望の至りである。

一、哲學堂の内容

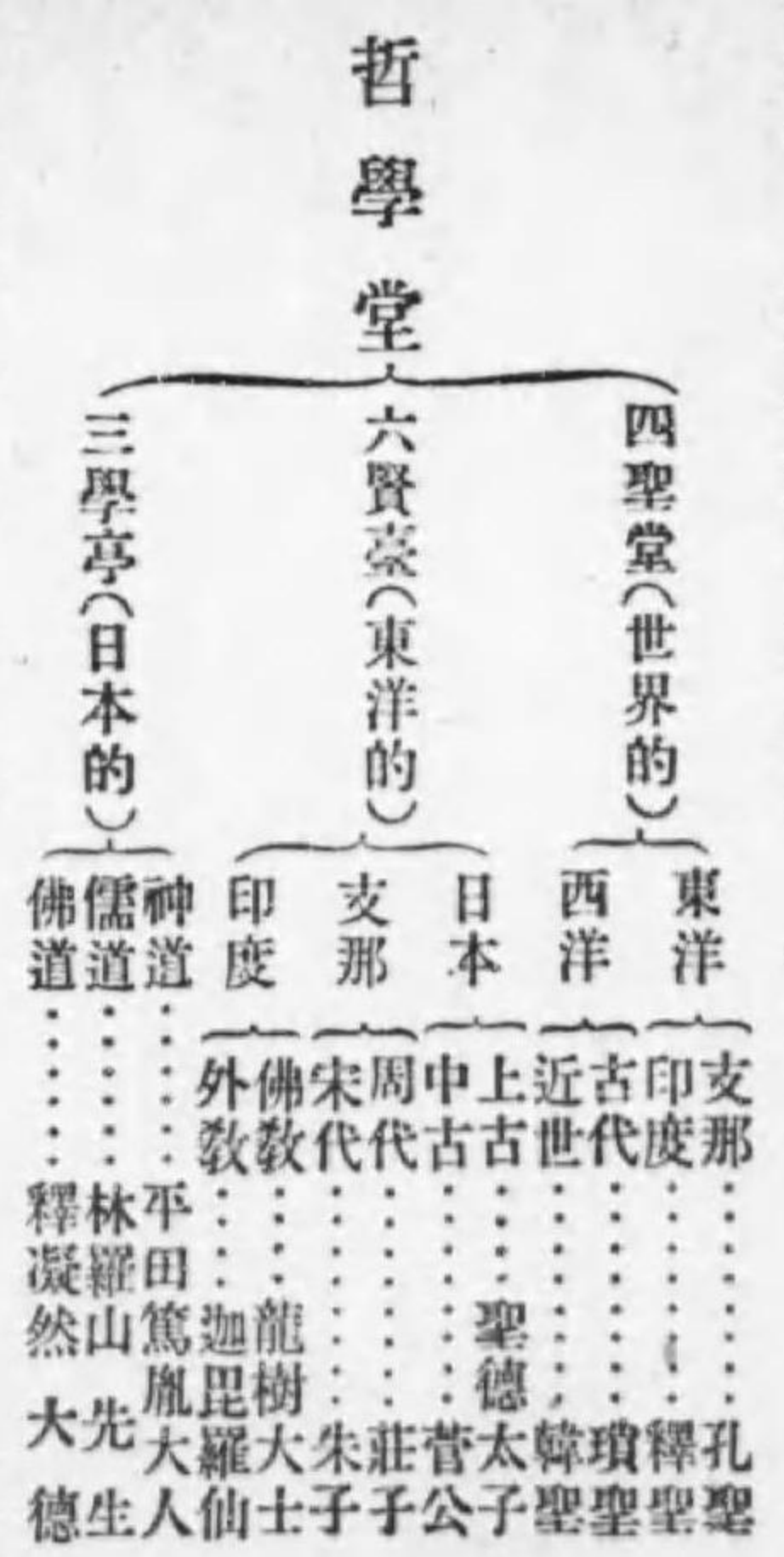
前述の如く哲學堂は總稱にして、其中に四聖堂、六賢臺、三學亭があります、四聖堂は釋迦、孔子、瑣克刺底、韓圖の四聖を奉崇せる處なるが、其中に何故に耶蘇を加へざるかと尋ねる人もあるけれども其堂が宗教堂にあらずして、哲學堂であることを心

頭に呼び起さは、直に分る筈ぢや、耶蘇は大宗教育家である、然れども哲學者ではない、何人の哲學史を披きても、未だ曾て耶蘇を一家の哲學者として取扱ひたるものを見受けぬ、之に反して釋迦の如きは宗教家にして且つ哲學者たることは、東西共に許す處である、現今世界中の哲學を分類するに、



右の通りであるが、其一つくより一人の哲學者を撰出して、支那哲學の代表者を孔子とし、印度哲學の代表者を釋尊とし、古代哲學には瑣翁を推し、近世には韓氏を推したる次第であります、此表を一見したならば、耶蘇を撰出する餘地なきことは明かである、昨年以來四聖堂の外に六賢三學を奉崇することとに定めたるは、別に譯がある、即ち此に參觀せるもの四聖堂中に日本の聖賢を缺きたるを遺憾なりと

云はるゝ人多ければ、更に擴張して日本、支那、印度より各二賢づゝを撰出することゝなし、更に又我邦神儒佛三道の學者中より各一人づゝの代表者を出すことゝなし、六賢臺、三學亭を設置することになつたので、其全表は左の通りである、



此等の聖賢は世間に紹介するまでもなく、多少の教育あるものゝ皆よく熟知せる所なるも、多數の人々に紹介せん爲に、其傳記の大略を叙述することに致しませう、然し其前に四聖堂及ひ庭園に就きて一言して置きたい。

三、四聖堂及庭園

先づ四聖堂の設計に就きて述ふるに、其堂は三間四面にして、四方正面である、中央に柱脚四箇の天井より懸りて、自然に天蓋の形をなして居るのは宇宙の形をあらはしたので、柱脚は天の四脚に象りたる積りである、其内面の金色銀色のガラスは天地の未だ分れざりしとき、混沌として鶏の卵の如しといへる昔話に本づいたのぢや、而して其中點の金色半球より赤色ガラスの球燈を垂れたのは、心を代表し、外圍の柱脚より方形の香爐をつるしたのは、物を表現したる意象である、心は透明にして圓く、物は不透明にして角なるべき想像より出てたる寓意である、之と同時に心は宇宙の神髓より發現し、物は宇宙の體質より分化したる意味を含めた積りである、又數多き小圓木の中心より外方へ散開して天井の椽となり居るは光線を現はしたのである、之を總合して本堂の理想的本尊とし、別に偶像を置かぬことに定めました。

庭園は丘上と丘下とに別れ、丘下に左右兩翼あり

て、右翼に物字園を設け、左翼に心字庭を置いた、
是れは唯物論と唯心論とを表示したのである、其
々の名稱を掲げませう、

丘上即ち中位の方

哲理門 (俗稱妖怪門にして其左右に天狗と幽霊の彫刻物がある) 常識門 四聖堂 六賢臺 三學亭 鑽仰軒 燭樓庵 鬼神窟 萬象閣 宇宙館 (此中に皇國殿を置く) 無盡藏(書庫) 時空岡 相對溪 理想橋 絶對境 聖哲碑 幽霊梅 天狗松 百科叢 學界津 一元牆 二元衢 懷疑巷

右翼即ち唯物園の方

經驗坂 感覺巒 萬有林 造化澗 神秘洞 後天沼(通稱扇狀沼) 原子橋(通稱扇骨橋) 博物隄 理化潭 進化溝 物字壇 客觀廬 左翌即ち唯心庭の方 意識驛 直覺徑 認識路 論理關 獨斷峽 心理崖 先天泉 概念橋 倫理淵 理性島 心字池 主觀亭

以上を總稱して哲學堂と定めた、其中には未だ建設せざるものもある、此等の名目を一々説明すれば、哲學の大意が分るやうに工夫したつもりである、其他に哲學堂八景と稱するものがある、富士暮雪 御靈歸雅 玉橋秋月 氷川夕照 藥師晚鐘 古田落雁 鼓岡晴嵐 魔松夜雨 是より傳記のあらましを述べませう。

四、釋尊

四聖の順序は年代の前後によりて定めることとし先づ釋尊より始むるに、釋迦牟尼佛世尊は、今より二千九百年前、印度迦毘羅城の王宮に降生せりとの説なれども、其年代は異説ありて一定し難い、但し今日の考證にては西洋紀元前五百年前後なりとのことちや、其種族は印度四姓中の刹帝利種である、漸く長ずるに及び、厭世出家の志を起し、自ら生老病死の何ものたるを究めんと欲し、年十九の時深夜宮人の熟睡せるを窺ひ、馬に跨りて城を出て、六年

八
或は十二年の間、山中に入りて苦行を修し、年三十の時、尼連禪河の畔に來り、菩提樹の下に坐し、正しく成道したまひたと傳へてある、是より歩を進めて恒河を渡り、鹿野苑に至り、小乗教を説かれたるを始めとし、五十年の間各所に法輪を轉じ、大小權實の諸法を演述せられたりとて、之を天台にては五時八教の次第を立て、取扱ひます、佛年八十にして拘尸那城に至り、沙羅双樹の間にありて涅槃に入らんとし、大音聲を出し普く大衆に告げらく、一切衆生若し疑義あらば最後の問をなせといはれたれば、諸大弟子等各供具を持して佛に詣し供養しけるに、皆黙して受けられず、又涅槃に入らざらんことを勸請せるものあるも、許したまはず、中夜寂然として聲なきに當り、諸弟子の爲に略して法要を説かれたるものが、今日傳はる所の遺教經である、既に之を説き了りて、頭北面西右脇にて入滅せられました、其弟子幾千人の中にて、舍利弗、目犍連、阿難、迦葉等は上足と云ふべき高弟にして、中に就きて迦葉

が付法傳燈せりと傳へらる、佛滅後大衆各處に集りて、佛所説の法を結集せしにより、經律論の三藏が今日に傳來することが出來た、釋尊の性行學識共に如何ばかり非凡にして偉大なりしかは、此に喋々する必要はなからうと思ふ。

五、孔 聖

孔夫子は其名を丘といひ、字を仲尼といひ、魯の昌平郷の陬邑に生れ、他の兒と共に遊戯をなすときにも、常に禮容を修め、長ずるに及び季氏の史となり、或は司職の吏となりたることがある、其後魯國を去り齊宋衛の諸國の間に往返奔走したりしも用ひられず、再び魯に歸るも、魯亦厚遇せず、是より退きて詩書禮樂を脩められたれば、弟子遠近より來り集りたりといふ、其後復た弟子をひきゐて諸國を歴遊しけるに、或時は孔子の狀貌陽虎に似たりとて匡人の爲に拘へられたれば、弟子大に懼れしも、孔子は天の未だ斯文を喪せざるや匡人それ子を如何せん

いひて、泰然として驚かず、又或時宋の司馬桓魋なるもの孔子を殺さんとせしに、孔子は天徳を予に生ず、桓魋それ予を如何せんといひて自若たりしが如きは、其人の偉大なる所以を知ることが出来る、晩年に及び易を好み、韋編三絶すといふ、弟子を教ふるに詩書禮樂を以てせられしが、其徒三千人、身六藝に通ずるもの七十三人ありとは、實に盛んなりと申さねばならぬ、顔淵が之を仰げは彌々高く、之を鑽れば彌々堅しといひたるも、孟子が生民ありて以來未だ此の如き人あらずと云ひたるも、孔子の人物人格の如何を想するに足る、夫子自ら終身天下を周遊して遂に用ひられざるを見て、天を怨みず人を尤めず、下學して上達す、我を知るものはそれ天かといひ、最後に春秋を作りて、後世丘を知るものは春秋を以てせん、丘を罪するものも亦春秋を以てせんといはれたるが如き、其志の如何を知ることが出来る、魯哀公十六年四月己丑の日を以て此偉大なる聖人が永眠に就かれました、其壽七十三である。

六、瑣賢

大賢瑣克刺底氏は紀元前四百六十九年希臘の亞典府に生れ、家貧にして父は彫刻を業とし、母は産婆たりしも、幼時已に普通の教育を受け、天資豪邁にして而も沈毅の人であつた、壯年の時戰陣に入り、其忍勇人を感嘆せしめたといふことぢや、其妻短氣にして激怒し易き性なるも、よく之を忍んで服せしめたりといふ、中年以後に至り、始めて人を教育せんことを志し、毎日市場、工場、公園の如き多數衆人の集る所に至り、老弱貧富を別たず、諄々として訓誨し、毫も倦むことなかつたと申す、其外貌は醜なるも、其内心は美にして、一たび相會して其話を聞くもの、敬服感歎せざるものなかりしと傳へられて居る、當時希臘にあつては詭辨學流行し、無益の言論を弄する弊ありしが、瑣賢は務めて之を排斥し、極力世の風教習俗を矯正せんとしたれば、世人の憤怒に觸れ讒せられて、死罪の宣告を受くるに至つ

た、斯る無實の罪に陥りしも、自ら辨護することを用ひず、從容自若として毒杯を仰ぎて長逝せられたるは實に其胸量の如何ばかり豁大なりしかを知るこゝとが出来る、其學説は知識を本とし、智即ち徳なることを唱へ、知りて惡をなすは、知らずして惡をなすに勝るとまで申して居る、其一代の言行は實に萬世の模範とするに足る人物である、後世西洋にありて教育倫理の學を講ずるに、瑣賢を以て元祖とせざるものはない、又其門下より續々秀才碩學を輩出せしめたるも、其感化の功に歸せねばならぬ、門弟中出藍の名を得たるものは、弗拉的氏である、瑣賢壽は七十歳であつて、後世より希臘の聖人と呼ばれて居ります。

七、韓 哲

近世無二の碩學大家たる韓圖氏は西曆一千七百二十四年普魯士國のケイニスベルヒ府に生れたる人である、其家はもと蘇國より轉住し來り、其父は馬具

を作るを業としたりしも、よく韓哲を教育して其業を卒へしめた、其母は謹直の人なりしが、韓哲は其遺風を受け、嚴肅正確の風ありて、一日中の動作進退皆規律を立て、之に從ひ、其時間を確守するが如きは、寺院の時鐘よりも正確なりとの評判であつた、其大學にあるや數學、物理、地理、論理、倫理哲學を教授し、頽齡に及ぶまで教授の椅子を占めて居られた、其一代の傑作たる純理批判は一千七百八十一年の發行にして、一たび世に公せらるゝや、當時の哲學界を震動する程の勢を有し、其人を景慕して、遠近の學者來りて刺を通ずるもの尠からざりしといふ、氏は生涯故郷を出でず、妻を娶らず、實に隱君子の風であつた、生來虚弱の質なりしも、攝生其宜きを心得て、八十歳の高齡を保ち、一千八百四年を以て永眠に就かれました、其最後の時まで著作に従事し、腦力の永續せしは驚くべき程である、其死したるときの如きは、全身骨と皮のみになり、恰も乾燥せるものゝ如くであつたと傳へてある、其著書は純理批

判の外に實踐批判、斷定批判等一々擧ぐるに違なれば、之を略して置きます、其人格性行共に學者の模標として、一點の間然する所なしといふて宜い、又近世の哲學は佛國の「デカールト」氏に始りて、韓氏之を大成せりと申しても差支ない。

八、聖德太子

次に六賢は近きより遠きに及ぼす順序を用ひ、先づ日本より始むれば、聖德太子は用明天皇の第一子にてあらせられ、生れながら言語をよくし、稟性聰明の御方にてまします、年漸く長ずるに及び、書を讀むことを好み、就中佛書を愛讀し、蘇我の馬子と共に佛敎を奉信せられました、是時守屋なるものありて佛を斥けんと欲し、爲に闘うて竟に敗死せし後は、佛敎大に興り、數十年を出てずして寺院四十六ヶ所、僧尼一千三百八十餘人を見るに至つた、推古天皇位に即かせらるゝに及び、太子をして政を攝せしめ、萬機を委任せられしかば、太子始めて冠位

十二階を作り、憲法十七ヶ條を定められました、即ち和を貴び、忤無きを宗とすべし、篤く三寶を敬すべし、詔を承くれば必ず慎むべし、群卿百寮禮を以て本とすべし、餐を絶ら欲を棄て明かに訴訟を辨ずべし、想を懲らし善を勸むべし、人各任あり掌宜く濫にせざるべし、群卿百寮早に朝し晏く退くべし、信は是れ義の本、每事信あるべし、忿を絶ち瞋を棄て、人の違を怒らざるべし、功過を明瞭し賞罰必ず當るべし、國司國造は百姓に賦斂すること無るべし、諸の官に任ずるものは同じく職掌を知るべし、群臣百寮嫉妬なかるべし、私に背て公に問ふべし、民を使ふに時を以てすべし、事に獨斷すべからずの十七條であるが、いづれも萬世の金言であります、其著作としては法華、勝鬘、維摩三經の義疏ありて、今日に傳はる、之を太子の三疏と云ひます、太子病ひに當り、勅問ありて遺言を尋ねられしに、佛法を興隆し伽藍を造修して、皇統を萬世に保護祈請せんことを願はれたりとの事ぢや、年四十九にして播磨

の斑鳩の宮に薨ぜられ、磯長の陵に葬られたれば、天下の百姓は父母を失へるが如く、一人として哀惜せざるものなく、哭泣の聲到處に聞えたりと申してある、太子は厩戸にて出産し給ひし由來より厩戸皇子といひ、又は豊聰耳、上宮等數名あれども、世間普通には聖德太子として知られて居ます、聖德とは叡明仁恕なるの稱にして、實に名實相應の御方と申して宜い。

九、菅公

菅原道真公は參議是善の第三子にして、幼より英才群を抜き、十一歳の時、詩を作りて人を驚かしめたることがある、貞觀年中文章生にあげられ、得業生となり、對策及第して累進し、兵部民部少輔を経て式部少輔に遷り、文章博士を兼ねることとなり、是より更に累進せられしも省略して置ます、而して昌泰二年に至り、藤原時平左大臣となり、公は右大臣となりたりしが、公の名望内外に高く、天皇の寵

任殊に厚き爲に、時平等の讒する所となり、貶せられて太宰府に左遷せられました、公常に梅を愛す、發するに臨み「東風吹かば香おこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれを」と詠みたる歌は、何人もよく知る所である、太宰府に遷りし後は、門を閉ぢて出でず、文墨を以て悶を遣る、離家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時々仰ニ彼蒼一の詩、及び去年今夜侍ニ清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣猶在、此、捧持毎日拜ニ餘光一の作の如きは、みな人口に膾炙するものである、延喜三年二月遂に五十九歳の壽を以て配所に薨去せられました、公は詩文を好くせしかば、其遺集今に傳はる、又嘗て諸儒と勅を奉じ、三代實錄五十卷を修し、又詔を奉じて、舊史を分類し、其名を類聚國史といふもの凡そ二百卷あります、かの遺誠中の凡神國一世無窮玄妙者不レ可ニ敢而窺知ニ雖レ學ニ漢土三代周孔之聖經ニ革命之國風深可レ加ニ思慮ニ也」の一章の如き、又は「凡國學所レ要雖レ欲下とろんわたことに、きはめんとてんじんよの上りはあらざるわてんかんさいふあたはうかぶその論涉ニ古今一究天人上其自レ非ニ和魂漢才ニ不能レ闕ニ其

闔奥一矣」の一章の如きは、實に千古の卓見にして、其學識德行共に深く敬服する所である、後世郡國到處に社を建て像を書きて之を祭り、菅聖と呼び、天満天神と稱するも、當然の事でありませう。

十、莊子

莊子は其名を周といひ字は子休と稱し、梁國又は宋國の蒙縣に生れ、梁の惠王、齊の宣王と其時を同らすとあれば、孟子と同時代なることは明かである其著書十餘萬言は大抵寓言にして、其の要老子に基つき、以て孔子の説を毀斥するを主としたものである、楚の威王其賢を聞き使を遣して之を迎へ、大に任用せんとしたれども、莊子笑て申すには、千金は重利、卿相は尊位なれども、彼の祭祀に用ふる犧牛と同じく、平日養ふに良食を以てし、衣するに文繡を以てするも、引いて太廟に入れらるゝに當ては自ら孤豚とならんと欲するも奈何ともすること能はず、我は寧ろ汚濁の地にありて、悠悠自得するを快

とすといひて辭退し、終身官に仕へず、其志の高きこと推して知るべしである、其著書は逍遙遊、齊物論、養生主、人間生、徳充府、大宗師、應帝王の諸篇を有するが、逍遙遊篇が全篇の眼目である、其文章は高妙にして深味を有し、鬼を出て神に入るの趣ありとの古來の評ちや、たとへ老子の學何ほど深妙を得たりとも、莊子を待つにあらざれば後世に流傳することは出来難い、古來莊子を讀むもの、唯其文の神妙を稱するのみにて、其説の高妙なるを言はぬ、是れ全く儒家の眼を以て見る故である、若し今日哲學上より觀察し來らば、其思想の深奥なるは文章以上にあることが分る、其説虚静恬澹寂寞無爲を主とし、死生を一にし是非を齊するにありと云ふも、其中におのづから宇宙の深秘を窺ひ、絶對の風光に接するの趣があります、斯る説を發表せる莊子其人の如何は、想像するに餘りありと云ふて宜し。

十一、朱子

宋の朱子、名は熹、字は元晦、自ら稱して仲晦、
 晦庵又は晦翁と號した、生れて僅に五歳の時に小學
 に入り、始めて孝經を誦して、已に其大義を了解し、
 八字を其上に題し、若不^レ如此^レ便不成^レ人と書
 したる程に天稟の神才を有して居つた、又群卿と共
 に游嬉するに沙を以て八卦の象を書き、之を熟觀
 して樂んだといふことぢや、學業は劉勉之と申す人
 より受けたりしが、朱子の非凡なるを見て己れの女
 を以て之にめあはした、高宗帝の紹興年中に登第し
 爾來職を州縣に奉ぜしことありて、其名日一日より
 高く、當時の士大夫たるもの程氏の學を名けて道學
 と申し居りしが、朱子之を承けて修學彌々篤く、學
 者大抵皆晦菴先生と呼びて、朱子を師宗し、四方其
 人を仰ぐこと泰山北斗の如くであつた、光宗帝の時
 に侍講より申し上げたる言に、若し徳に進み業を修
 めんと欲せば、天下第一の人を尋ねて之を用ふへし
 といひしが、其第一の人とは朱子を指したるのであ
 る、後に寧宗帝位に即かせらる、に及び、慶元年中

朱子召に應じて朝廷に至れども、其反對黨より僞學
 を以て目せられ、纔かに官にあること四十六日にし
 て、職を罷められ、退きて諸生と學を講じて休まず
 慶元六年病にかゝり、愈々危篤なるに至り、正坐衣
 冠を整へ、枕に就きて猶ほ紙筆を索めんとする狀あ
 りしも、筆を握りて運すること能はず、恬然として
 逝きたりとのことぢや、時に僞學の黨禁嚴なりと雖
 も、會葬せるもの數千人の多きに及びたりとは、其
 徳望の如何に大なりしかを判知することか出来る、
 壽七十一歳、諡して文と云ひ、後に孔廟に従祠せら
 れしとは、死後の餘榮も亦大なりと謂はねばならぬ。

十一、龍樹大士

釋尊滅後小乘獨り行れたりしが、其教中に異見
 を起し、二十部又は五百部に分立するに至り、小乘
 漸く衰へ、四百年を過ぎて佛教將に五印度に地を拂
 はんする有様なりしが、前に馬鳴、後に龍樹出て、
 大乘を唱へ、佛教復び興起するに至れりと傳へてあ

る、龍樹大士は南天竺婆羅門種の末孫にして、佛滅後七百年の頃、世に出てたりと申す、天性聰悟にして、幼時人の四韋陀を誦するを聞きて四萬偈を作る、年弱冠にして天文地理及其當時諸學術一として通曉せざるは莫く、諸國に獨歩する程の勢であつたとのことぢや、一時は朋友と共に謀りて學術の蘊奥を究めたる上は、情慾を恣にせんと欲し、無道の行をなしたるも、後に悟る所ありて道心を起し、佛教に入り經律論三藏を修了し、更に餘典を索めたりしが、偶々大龍菩薩の指導によりて、共に龍宮に至り、大乘經典を探り得て、其深義を究め、南天竺に歸りて盛んに外道を排して大乘を弘めたりといふ後に法を提婆に付し、問室に入りて出てざりければ、弟子戸を破りて之を視るに、三昧に入り、蟬脱して天竺の諸國を去るを見たりと傳へてある、其所造の論部、大方便論五千偈、大莊嚴論五千偈、大無畏論十萬偈、優波提舍論十萬偈ありと申すが、今日藏經中に入りて我邦に現存するもの、中に大智度論、

中論、十二門論、十住毘婆娑論等ありて、何人も其所說の大乘の教理を窺ふことが出来る、世呼びて八宗の祖師とし、佛教の中興とし、第二の釋迦として崇信するも、固より其所なりと謂うて宜い。

十二、迦毘羅仙

印度にありて婆羅門教の餘流を汲みたる哲學が六大學派に分れて居るが、其中最も名高きものは「サンキヤ」即ち數論の學派である、此派の開祖を迦毘羅仙人と申します、迦毘羅の名は黃赤色の義にして、其鬚髮面色共に黃赤色なるが故に、斯く名けられた、其年代は或は成劫の初に出づとも、或は空より生ずともありて、詳かに知ることは出来ぬ、然し釋尊より以前に世に在りしことは明かである、此仙人は自然に法と智と離慾と自在との四徳を有し、遍く世間を觀察せるに、人の闇黒なる中に沈没するを見て、可憐の情を起し、阿修利なるものを得て、之が爲に二十五諦の法を説かれ、阿修利之を受けて更

に其法を般尸訶に傳へたといふことぢや、般尸訶の授かりし時には六萬偈ありしも、其後更に相傳へて自在黒に至り、此の如き大偈は人の受持し難きを知り、之を略して七十偈としたる由、即ち今日存する所の金七十論が其偈文である、之に金の字を冠したるは、國王より金を賜はりし紀念として用ひたりと傳へられて居る、其二十五諦とは自性大我慢、五大五唯、五知根、五作根、心平等根、神我のことでありて、是れが數論哲學の骨目であります、其中自在と神我との二者は、本來自存せるものにして、中間の二十三諦は自性と神我と相依り、而も自性の開發より次第に變遷して生じたるものとの説ぢや、而して自性には發動の力ありて、神我は之を有せず、自性は無知にして神我は智者である、前者は作者にして盲者、後者は受者にして跛者、即ち自性と神我と相合するは、盲者と跛者と相合するが如しと説き、是によりて迷悟の生起する所以を示したのが數論の説である、たとへ其説の開祖たる迦毘羅仙の傳記は

明かならざるも、其人の學識性行の如何に深大なるかは多少推想することが出来る。

十四、平田篤胤大人

平田篤胤大人は和學者の泰斗にして、幼名を正吉通稱は大角と呼び、安永五年出羽國秋田の城下に生れたる人でありませす、其父は佐竹家の藩士である、大人八歳の時より漢學を學び、後に醫術を修め、二十歳に及んで奮然として志を起し、書を留めて、郷國を去り、僅に一兩の小金を所持して旅程に上り苦難を侵して漸く江戸に達したるも、藩にもたよらず、朋友をも恃まず、獨立獨行、唯良師を得て之に従はんと欲し、糊口の爲に艱難辛苦を嘗むるも更に之を意とせず、流浪すること四五十年の長きに及びたりとのことぢや、幸にして寛政十二年備中國板倉家の藩士平田藤兵衛の嗣となるを得て、居を江戸に定むることになつた、享和元年始めて本居宣長翁の著書を見て、大に發見する所あり、爾來専ら古道を振

興せんことに力を盡し、文化元年家號を命じて眞菅乃屋と稱し、門戸を開きて徒弟を教授することを始め、是より後毎年書を著して古道を弘め、更に家號を伊吹乃屋と改め、其名愈々遠近に弘まり、其著書献上の命を拜するに至り、是に於て秋田藩に於ても祿百石を給與せらるゝことになりました、大人は文政十四年秋田に歸り、間もなく病にかゝり、遂に同年九月十一日を以て黄泉の客となりたるが、其壽六十八歳であつた、其一代の事業は古學を興すにありて、其著書百餘部に達し、門人一千餘人の多きに及び、神道之に依て勃興したるは、非凡の偉人と云はなければならぬ、弘化二年諡を賜はりて神靈能眞柱大人といふことになりました、

(此三學の撰定は豫め著述の最も多き人を取ることに標準を設けて神儒佛三道の學者を考察せるに神道にては本居大人よりも平田大人の方、著作の種類が多きを認めれば、後者を當撰することになりました、然るに前者を推す人も多々ある様に見

受けたれば、數十名の學者諸氏に意見を徴したれば、原案の儘を賛成せる人の方多數を得たるにより平田大人に決定することになりました、是れは後日の参考までに申し置く)

十五、林羅山先生

林信勝、即ち羅山先生は徳川幕府の儒官なるが、其祖先は加賀の人にして、後に紀州に移り、其父は京都に住したりとのことぢや、生れて非凡の才あり八歳の時に人の太平記を讀むを聞き、忽ち之を讀記せりとて、人皆呼びて神童と申したといふ、年十四にして建仁寺に入り書を讀まんとするも、時尙は戦亂の世にして書籍を得ること難ければ、百方搜索し、偶々一書を得れば讀書夜を徹するに至り、斯くして漸く長ずるに及び、益々廣く百家の説を搜り、凡そ字の冊をなすもの一として窺はざるものなき程であつたとのことぢや、而して其最も尊崇する所は六經にありて、其本旨を得たるものは程朱の學なり

となし、遂に門を開きて宋儒の説を講ずるに至つた、
 是時に當り洛北に隱栖せる藤原惺窩を慕ふて、其弟子となり、益々經義に通曉したれば、徳川家康其名を聞きて之を召し、慶長十一年命じて博士となし、顧問の位置に置かれた、其後薙髮して道春と稱し、民部卿法印に叙せられ、大に信任を得、朝議律令まてを起草したりといふ、徳川四世に歴仕し、明暦三年正月廿三日を以て歿去せられました、其壽七十五歳、信勝は其名、羅山は其號にして、諡を文敏と申します、羅山先生は博覽強記、殊に文才に長じ、暫時も筆を休めず、其著作頗る多し、今其主要なるものを擧ぐれば、東鑑綱要、群書治要補、儒門思問錄、倭漢法制、本朝編年錄、貞觀政要抄、渾天義考、性理字義諺解、經籍和字考、四書集註抄、道統小傳、神道祕傳、神社考等にして、一代の編述凡そ一百七十餘種あり、其中羅山文集の如きは一百五十卷の多きに及ぶ、實に近世の碩學にして、且つ大著述家と申さねばならず、其歿後林氏の學相傳へて今日に及

十六、釋凝然大德

び、徳川三百年間を風靡し、儒學之に依りて大に勃興したれば、先生は眞に儒門の中興であります。

釋凝然大德は今より約六百年前、即ち仁治元年に伊豫國高橋郡内の藤原氏の家に生れられたる御方にて、其號は示觀と申します、天性聰明にして、佛緣淺からず、幼少の時より佛教を開くことを喜び、人より一たび口授されしことは、よく諸記して忘れたることなかりしと申すことぢや、年僅に十五歳にして、奈良東大寺戒壇院に投じ、圓照門下に入りて剃髮受戒し、是より宗性と云へる人に就きて華嚴の學を修め、其後三論法相の諸學をも兼修し、更に京都に遊びて禪學の理を窺ひ、旁ら孔老百家の道に通し、博學多識、諸宗の教理一として曉通せざることなき程なるも、自ら華嚴を本領として居られた、初めて講義を大佛殿に於て開かれしとき、南都七大寺の諸師争ひ來りて其席に列せられ、其後開講ある

毎に、聽衆雲の如く集りたりとのことちや、後宇多上皇南都に巡幸遊ばせられたるとき、大徳は戒師となりて菩薩戒を授け奉り、其後御召によりて五教章を講じ、國師號を賜りたりと其傳記中に見えて居る、元亨元年九月五日を以て戒壇院に入滅し、鷲尾山に葬る、其齡八十二歳、僧臘六十三年とのことちや、其學八家九宗、和漢の諸學に通達し、自ら華嚴を本宗とするも、偏見僻説を有せず、其著作中大部のものには華嚴探玄記洞幽鈔百二十卷、五教章通略記五十二卷を始めとし、一々列擧するに違あらず其最も世間に流布せるものには八宗綱要、三國佛法傳通緣起等ありて一代の撰述總して百六十餘部一千百餘卷ありとは實に驚くべき著述家ではありませぬか其筆を下すや毫も草稿を認めず、批點を加へず千萬言立所ろに成り、雄篇大冊日ならずして完結するといふ、實に希世の英才にして、而も又博雅の大徳の人てありました。

十七、結言

以上各家の傳記は從來通俗に傳はれる儘を記載したるものである。其要は各家の人物の一端を知らしむるに止まる、若し年代の前後を以て列すれば、第一迦毘羅仙、第二釋尊、第三孔夫子、第四瑣賢、第五莊子、第六龍樹大士、第七聖徳太子、第八管公、第九朱子、第十釋疑、然大徳、第十一林羅山先生、第十二韓哲、第十三平田篤胤大人の次第になるかと思ふ、之を教育勅語に對照するは、勅詔は修身道徳の規則なり、大本なり、原形なりでありて、以上の聖賢は實例なり、現實なり、體質である、即ち抽象と具體との相違であるから、二者相待ちて修身の實行を見ることが出来る道理である、故に哲學堂の宇宙館の中の皇國殿には、教育勅語の謄本を扁額として掲げ、此席に於て時に應し折に觸れて修養講話をなすことに定めて居る、兎角哲學のみを研究するものは、動もすれば世界あるを知りて國家あるを忘れ

て人類に重きを置きを置きて皇室を軽く見るが如き恐れなきにしもあらねば、特に注意して皇國殿を置き、勅語を掲げたる次第である、其入口に
 宇宙萬類の中、人類を最尊となし
 世界萬國の内、皇國を最美となす
 と題したる點は人をして皇國の尊きことを忘れざらしめんとする微意であります、

又將來此庭園を私設公園とするに於ては、小圖書館小博物館も併置し、若し我力にて出來得べくんば、學生監督所をも設けたいと思ふ、淺草や上野や日比野の公園の如きは、寧ろ肉體修養の公園と謂はねばならぬ、之に反して哲學堂は純然たる精神修養の公園にするつもりである、人には身心二者ありて双方を修養する義務ありとする以上は、斯る二種の公園の共に必要なることは喋々するに及ばぬ、それに就ては精神修養に必要な書籍や物品を集めて、圖書館博物館を設け、獨り讀みて樂むと衆と共に讀みて樂むといづれか樂き乎、獨り觀て樂むと衆と共に

に觀て樂むといづれが樂き乎、獨り遊びて樂むと衆と共に遊びて樂むといづれが樂き乎、曰く衆と共にするに如かずの主義を執り、永く此庭園を公開して同胞同類と共に樂まんとする心算である、つまり此一事を以て生來長く國家社會より受けたる大恩に報謝せんとする微衷に外ならぬ、即ち余の死後之を遺物として、國家社會に貢獻する決心である、但し何分にも微力にして己れの理想通り實現が出来るか否かは保證し難いけれども、事情の許す限り身心二力を此一事に注ぐ覺悟であることを公言して置きます。

大正二年六月二十五日印刷
大正二年六月二十八日發行

著者及
發行者
井上圓了

東京市本郷區富士前町
五十三番地

印刷者
高桑基次

東京市牛込區市谷
加賀町一丁目十二番地

印刷所
株式會社秀英舍第一工場

東京市牛込區市谷
加賀町一丁目十二番地

東京市本郷區富士前町五十三番地

發行所 國民道德普及會

274
229

終

